

# トルコ航空によるイラン在留邦人救出事件

トルコが日本に示した最高の友情に小泉純一郎前総理も大感激

森永 堯

日本・トルコ協会 創立 80 周年記念  
アナトリアニュース 118 号 別冊

## はじめに

アナトリアニュース117号(2006年8月発行)で、2006年5月17日にイスタンブルにおいて日本政府がトルコ航空関係者11名に叙勲の伝達式を行ったことを「超親日国トルコへ小泉首相が大感謝」という題で報告させて頂いた。

トルコ航空によるイラン在留邦人救出事件(1985年)に興味をもった人は小泉純一郎前首相のみならず極めて多いので、日本・トルコ協会創立80周年記念として、経緯とその意義を一括記述させて頂くことになった。この機会を与えて下さった関係者の皆様に心から感謝申し上げる次第である。

2006年12月

日本・トルコ協会 理事 森永 堯

## 1. イスタンブルに緊急電話

緊急電話が鳴り、私は受話器を取った。相手はこう言うのだ。

「イラクのサダム・フセイン大統領が“1985年3月19日20時以降、イラン領空を通過する航空機は民間機といえども安全を保障しない”と警告を発した」

「イランにいる在留外国人は一斉に出国しようとしている。在留邦人も脱出しようとしているが、乗せてくれる飛行機がない。ついては在留邦人救援のために、トルコ航空を飛ばしてもらおうよう、トルコ政府にお願いできないか？」

「彼らは危険にさらされているのだ！頼む！助けてやってくれ！」

と、悲痛であるが同時に突拍子もない内容であった。当時、私は伊藤忠商事のイスタンブル事務所長をしており、緊急電話をかけてきたのは本社であった。

## 2. テヘランで何が起きたのか？

1980年に始まったイランとイラクの戦争は年々激しくなり、1985年になるとイラク空軍機がテヘランを空襲し、脅かすようになっていた。当然イラン側もイラク機を迎撃しようとするので、イラク空軍機はイラン空軍機を迎撃を恐れ、1万メートルの上空を飛来するのであった。

イラク空軍機の爆撃の狙いは、イランの最高指導者ホメイニ師邸をはじめとする高官の家である。ところが、1万メートルもの上空から爆弾を落とすとも風の影響が強すぎて、狙い通りに着弾せず、周辺に落ちてしまう。ホメイニ氏邸はじめ政府高官の住居は山裾の高い所にあり、その辺りは高級住宅地なので外国人も多く住んでいる。日本人もほとんどがそうした高級住宅地に住んでいた。ホメイニ師邸をそれた爆弾は、こうした周辺の外国人の住居に落ち炸裂した。

爆撃を逃れるために日本人はテヘラン郊外に疎開し、脱出のタイミン

グを計っていた。オフィス街は住宅地から山裾を下った中腹に位置しているので、住宅地よりは相当離れている。したがってオフィス街は爆撃にさらされていない。日本人駐在員達は疎開先からオフィスに通い、仕事を終わると夜に家族の待つ疎開先に戻るといった異常な生活をしていた。そこにサダム・フセインの声明が出たのである。

「1985年3月19日20時以降、イラン領空を通過する航空機は、民間機といえども安全を保障しない。」

つまり、「民間機であっても撃墜する」という恐ろしい声明が発出されたのである。イランに住む外国人達は「もはやこれまで」と、即刻脱出しようと色めき立った。そして荷物をまとめる間もなく、一斉にテヘラン空港に殺到した。日本人達もとるものとりあえず家族を連れ、テヘラン空港に向かった。

## 3. 絶望のテヘラン空港

当時、日本の航空会社はJALもANAもテヘランには乗り入れていなかったため、外国の航空機で脱出することになる。ソ連(当時)のアエロフロートなら乗せてもらえるというのでオープン・チケットを事前に入手していた日本人も多かった。

ところが、空港のアエロフロートのチェックイン・カウンターにチケットを呈示しても、アエロフロートは、「ソ連人かワルシャワパック加盟国の国民が優先」と言って取り合わない。当時はソ連邦崩壊の前だったので、今で言うならロシア、CIS諸国、東欧諸国、中欧諸国の共産圏の国民が優先と言ったのである。さらに詰め寄ると、「それらの人達で既に満席であり日本人に回せる席はない」と搭乗を拒否したのである。

「それならば」とルフトハンザ・ドイツ航空のカウンターに行くと、「ドイツ人とEC(当時)の国民優先であり、すでに満席」と言われ、日本人は搭乗を拒否された。エールフランス航空に当たってみても、「フランス人か、EC加盟国の国民が優先」と突っぱねられた。

という具合で、次から次にどこの航空会社に当たっても「自国民優先

主義」を掲げられ、外国人である日本人の搭乗を受け容れてくれる航空会社はなかった。

このような状態であったので、日本人は脱出便が見つからず途方に暮れたのである。特に家族連れの日本人駐在員は、奥さんや子供達を脱出させる便が見つからないことから、絶望感と焦燥感でパニック状態に陥ってしまっていた。

#### 4. それにしてもなぜ関係のないトルコ航空なのだ？

こうした実情がテヘラン事務所から東京本社に伝えられ、東京本社からイスタンブール事務所の私に、「トルコ航空を救援に派遣するよう、トルコ政府にお願いできないか」と緊急電話をかけてきたのである。

でも私は不思議に思った。

「日本人がこんなに危機に直面しているというのに、なぜ日本の航空機が救出に来ないのか？」

「なぜ、イラン航空は救援機を出さないのか？」

「今起きている問題は“イランにいる日本人の問題”だから本来イランと日本が当事国である。トルコは全く関係のない第3国である。それなのになぜトルコが巻き込まれるのか？」

「どうして全く関係のないトルコ航空が日本人を救出しなければならないのか？」

#### 5. トルコ政府に質問されたら答えようがないじゃないか？

「トルコ政府にお願いするにしても、トルコ政府から次のように質問されたらどのように答えたら良いのか？」と私は考え込んでしまった。

「なぜ日本の航空会社は来ないのか？」

「なぜイランの航空会社に頼まないのか？」

「テヘランには大勢のトルコ人がいる。トルコ政府としてはまずはトルコ人を救出すべきなので、その対策で頭が一杯である。外国人である日本人救援のことまで頭が回らないのが実情なのに何を言っているのだ？」

「日本人を救援するにしてもトルコ人救出の後になるが、構わないのか？」

こうした質問が出てもすぐに答えられるよう、説得力のある回答をあらかじめ用意しておかなければならない。しかし、そんな回答案を準備するのは、私には難しかった。

#### 6. 3つの決意

良い考えが浮かばないまま、いたずらに時間が過ぎていく。一方で、テヘランの在留邦人の窮状を思うと、もはや思案している場合ではなく、一刻も早く行動を起こさねばならないのは重々解っていた。しかし、このまま回答案を考えないまま行動に移すと、説得どころか、かえって逆効果になりかねない。

結局、いくら考えても妙案が浮かばなかった。やむをえず私は意を決した。そして3つのことを決めた。

(1) まず、全ての業務に優先して救出作戦を行うこと。当時、私は第2ボスフォラス橋プロジェクトを受注しようとその活動に没頭していた。その日も受注作戦を立てるための国際戦略会議を行う予定にしていた。最も重要な会議であったが、人道上の理由ということで、早速会議をキャンセルした。

(2) なにがなんでもトルコ航空を派遣してもらわねばならないので、頼む相手を絶対に間違えてはならない。またトルコはトップ・ダウンの国なのでトップにお願いするしかない。無理筋の話なので、無茶なお願いでも即断即決で引き受けてくれるトップでなければならない。しか

も私の親しい友人で、お願いしやすい人でなければならない。押しチャネルを間違えてはならない。となるとトルコではたった一人しかいない。「そうだ！オザル首相にお願いしよう！」と決めた。

(3)本来、筋の立たないお願いなので、これ以上へたな思案をせずに、無手勝流となってもしょうがない。体当たりでお願いしてみよう。少なくともオザル首相ならきっと話を聞いてくれるだろうし、理解してくれる。良いアイデアを出してくれるかもしれない。

以上3つのことを決め、実行に移すことにした。

## 7. 暗号「アセイ」

当時、トルコでは電話を傍聴されることが多かった。電子メール等はまだない時代であり、テレックスが通信手段の主流であった。しかしテレックスも傍受されていた。そこで我々駐在員は、暗号を使い通信していた。オザル首相の暗号は「アセイ」であった。体格が作曲家の小林亜星さんに似ていたので「アセイ」を暗号にしていた。

ところで、世界の政治家の中でも彼ほどお腹の出っ張った人は少ない。初めて彼に会う時に誰もが「これから首相に会うのだ」と緊張しているが、実際に彼に会うと、彼の人なつっこい笑顔とお腹を見て、ほっとして緊張が解けてしまう。そして相手が首相であるにもかかわらず、安心してなんでも素直に、率直に話を始めるのが常であった。こうして緊張が解け安心した面談者から、オザル首相は想定外のこともたくさん聞き出すことができ、参考になる情報をたやすく、しかも豊富に得ていたのである。

また、人の話をよく聞く人でもあったので、彼の風貌と人柄もあり、面談者は一度会談するとたちまち彼の虜になり、ファンになってしまうのであった。こうして世界中にオザル・ファンが広がっていったのである。

なお、トルコ国民からは「トントン」と言う愛称で呼ばれ、親しまれていた。新聞を広げるとトントンがどうしたとか、トントンが何を言ったとか、報じられていたのである。一国の首相があだ名で記事にされる珍しい人柄の持ち主であった。ところで、オザル首相の夫人セムラさんの暗号は「ノリコ」であった。歌手の故・淡谷のりこさんのような体躯なので「ノリコ」と称し、暗号として使っていた。

どちらも堂々とした体躯の持ち主であるこの夫婦の仲はとても良い。一般的にイスラームの世界では奥さんが表に出ることは少ないが、オザル首相は努めて奥さんを同行させていた。それも、手をつないで人前に堂々と現れるのである。人々はそんな夫妻を見るとびっくりするものの、ほほえましく親愛の情を抱いたのである。マスコミもよく奥さんと手をつないでいるトントンの写真を報じていた。トントンは国民から本当に愛されていたのである。

## 8. 「アセイ」への電話

私は意を決して「アセイ」にお願いしようと、受話器に手を伸ばした。それまでにも「アセイ」とはしょっちゅう電話をかけ合っている仲だったので、その時も“緊急”ということで幸いにもすんなりにつながった。

勿論、面と向かって話す時、私はオザルさんをいつも苗字ではなく名前前で呼ぶ。ただし呼び捨てにはせず、「トゥルグット」と言う名前の後にトルコ語の男性に対する尊称の「ベイ」を付け、「トゥルグット・ベイ」と呼んでいた。日本語なら「トゥルグット兵衛」に当たる。

彼は私を「モリナーガさん」と日本通らしく「さん」付けて呼んでいた。彼はどういうわけか、私にはいつもトルコ語で話すことを求め、それがいつの間にか慣習となっていたので、その時もトルコ語での会話であった。

「トゥルグット・ベイ！助けて下さい。」

「どうした？ドストウム・モリナーガさん」

ドストウムはトルコ語で親友の意味である。つまり「親友モリナーガ

さん」と彼は呼応した。

「トゥルグット・ベイ！トルコ航空に指示を出して、テヘランにいる日本人を救出して下さい。」

「テヘランにいる日本人がどうしたと言うのだ？モリナーガさん。」

私は順々とテヘランでの日本人の窮状を説明した。そして続けた。

「トルコ航空を在留邦人救出のために派遣して下さい！トゥルグット・ベイ！」

「これは、イランにいる日本人が困っている話なので、イランと日本との間の問題であり、本来トルコには何の関係もない話です。イランの航空機あるいは日本の航空機が救援すべきなのです。しかしイランの航空機は戦争中なので便数に余裕がありません。また、イラン航空機ではイラク機に撃墜される危険性もあります。日本の航空機は、救援機を出しても遠すぎて、サダム・フセインの出した警告期限に間に合いません。今、日本にとって頼れる国はトルコしかないのです。」

なおも私は訴え続けた。

「イランには大勢のトルコ人ビジネスマンがいるのを承知しています。トゥルグット・ベイ、あなたはトルコの首相なのでまずはトルコ人を優先して救出したいと考えておられるのは当然です。しかし、日本人をトルコ人と同等に扱って欲しいのです。トルコ人を救出する飛行機の他に、さらに日本人を救出する飛行機を出して頂きたいのです。しかも即断即決を要します。事情が事情ですから、私にとってこんなことをお願いできるトルコ人は、トゥルグット・ベイ、あなたの他にいません。トゥルグット・ベイ、助けて下さい！」

オザル首相は私の話を黙って聞いていた。いつもならすぐに返事をするのに、その時は私の話を聞き終わっても珍しく何も言わずに沈黙を続けていた。勿論、電話はつながっている。私は固唾を呑んで彼の言葉を待っていた。「YES」とも「NO」とも言わない。

私にはこの沈黙の時間がものすごく長く感じられた。その間、「断られたらどうしよう」とか色んなことが頭をよぎる。でも彼は電話の向こうで沈黙を続けたままである。やがてオザル首相は口を開いた。

「わかった」

「心配するな。親友モリナーガさん」

「後で連絡する。」

これを聞いて、私はしばし呆然としてしまった。「質問されると返事に困るな」と怖れていたことはおろか何の質問もないまま、いきなり「心配するな」と言ってくれたのである。私は小躍りしたくなるほど嬉しかったが、胸が詰ってしまい「大変ありがとうございます。トゥルグット・ベイ」というのが精一杯であった。こうして電話は終わった。

ところでオザル首相に「心配するな」と言われた時に正直言って、私は一瞬心配になった。「心配するな」と言われてかえって心配になったのである。トルコ人は一般的に物を頼むと簡単に「心配するな」と言ってくれるが、結局うまくいかず、リップ・サービスで終わるケースが多々あったからである。

案の定、その後トルコ政府の誰からも連絡がなく、トルコ航空からも連絡が来ない。私はいっても立ってもいられず、親しい首相補佐官達に次々と電話をかけまくり、「オザル首相から私に何か連絡するよう指示が出ていないのか？」と聞いた。でも、お願いの内容が内容だけに、補佐官とはいえオザル首相にお願いした内容を私が明らかにするわけにはいかないで、いずれももどかしい会話となってしまった。

このままもたもたしていると、サダム・フセイン声明の敷いた制限時間に引っかけ、折角トルコ航空が救援に行っても、イラク機に撃ち落とされかねない。「心配するな」と言ってくれたオザル首相の言葉を思い出し、やはり心配しなければならぬのかと思ったりもした。

## 9. オザル首相遂に大英断を下す

数時間後、私にはそれほど長く思えた頃になってやっとオザル首相自身から電話があった。どきどきして私は彼の言葉を待った。彼は落ち着いた声で、「ハイレッティム(全てアレンジした)。心配するな。親友モリナーガさん」と言ってくれたのだ。

「日本人救援のため、テヘランにトルコ航空の特別機を1機出す」

「詳細はトルコ航空と連絡をとったら良い」

「日本の皆さんによろしく。」

それを聞いて、私は驚くと同時に体の芯から喜びが湧き上がるのを抑え切れなかった。私は言った。

「トゥルグット・ベイ！大変、大変、大変ありがとうございます」

「何も難しい質問をせず私の願いを聞き入れて頂き、ありがとうございます」

「日本人の救出のために救援機を出して、後で政治問題になるかもしれないのにリスクを取って大決断して頂き、ありがとうございます」

「どんなに感謝しても感謝できません」

「早速テヘランの日本人にこの大英断を伝えます。大変ありがとうございます。」

私は電話を切ると、この朗報を直ちに東京に報告した。勿論、暗号を使った。当時はイラン・イラク戦争中だったのでイランの通信事情が悪く、イスタンブルからテヘランに直接連絡するよりも東京経由の方が断然早かったからである。



オザル首相（右）と筆者

## 10. それでも信用しようとしなないテヘラン在留邦人

ところが、折角トルコ航空が救援機を出してくれると言うのに、今度はテヘランに在留している日本人達は素直に信じようとはしなかった。

「トルコ航空は本当に日本人を搭乗させてくれるのだろうか？トルコ航空も自国民たるトルコ人の救出を優先するだろうから、日本人に席を分け与えないのでは？」と、彼らは疑念を持ったのである。

当時テヘランに滞在していたトルコ人ビジネスマンは、600人を優に超えていた。トルコ政府にとっては、まずそうした在留トルコ人の救出に当たるのが当然のことなので、トルコ航空が飛んできて他の国の航空機と同じようにトルコ人の救出が優先されてもやむを得ないと彼らは思ったのである。そうなる日本人には席が回ってこない可能性があり、日本人が本当に搭乗できるのかといふかかったのも至極当然のことであった。

日本人は、それまでどこ航空会社にも搭乗を拒否され絶望の淵にいたので、疑心暗鬼ながらトルコ航空のチェックイン・カウンターに進んでみた。そして、最初に並んだ日本人が首尾よく搭乗券を実際に手にすると、歓声が上がった。懸念が安心に変わると、後に並ぶ日本人達は順番が来るのを、はやる気持ちを抑えつつ待つのであった。

特に家族連れ日本人達は自分の順番が来て実際に搭乗券を手にした時に、それまでパニックに陥っていただけに、「これで脱出できる」と、親として夫としての責任感を達成した安堵の気持ちで包まれ、感激もひとしおであった。

## 11. トルコ航空、標高5,165mのアララット山を通過

搭乗手続きを終えると、日本人達はトルコ航空救援機に急ぎ乗り込んだ。全員が着席し、落ち着いて間もなくすると、救援機は滑走路に向かった。車輪が滑走路を離れ離陸した瞬間、誰もが、「ああ、やっとな戦禍の

テヘランを離れることができたのだ」と実感した。

水平飛行してしばらくすると、やがて眼下にアララット山が見えてきた。ノア方舟が漂着した標高5,165mもの山である。この山はイランとトルコの国境に位置しているため、越えるとトルコ領域となる。アララット山を通過するとパイロットがアナウンスを行った。

「ご搭乗の皆様、日本人の皆様、トルコによろこそ！」

このアナウンスを聞き、全搭乗者がどよめき大歓声を上げた。そして口々に叫んだ。

「トルコ領に入ったぞ！」

「イランを脱出したぞ！」

「やった！やった！」

「万歳！万歳！」

国境を越えたことで、彼らは危険溢れる戦地から命からがらやっと逃れた安堵感を確信できたのだ。どこの航空会社にも搭乗を拒否されたが、最後に危機一髪、思いもよらぬトルコ航空に乗ることのできた気持ち。戒律も厳しく、イラクと戦争中であることから何かと制限も多く、緊張を強いられたイランからやっとの思いで脱出した安堵感。

一方、トルコはイスラーム教徒が90パーセントを占めるものの、信教の自由が憲法で保障されている平和な国。そんなトルコ領に入ったことで、彼らはそれまでの緊張感から完全に開放され、自由となり、心からリラックスできる安心感を実感したのである。

昨日からの一連の出来事が思い出され、色々な気持ちが一度にないまぜになり胸に溢れ、万感込み上げ泣いてしまった人達も多かった。殊に家族連れ日本人達は涙を浮かべつつ、喜びを爆発させていた。

## 12. 地獄から天国へ

私は空港に大型バスを仕立てて迎えに行った。やがて飛行機はアンカラ經由イスタンブールのアタテュルク国際空港に着陸した。ところが、到着した彼らを見て驚いた。いつも見慣れている到着旅客のいでたちとは

異なっていたからである。薄汚れた普段着を着て、ビニール袋に取り敢えずの生活必需品を入れただけの持ち物を持ち、子供の手を引いて、文字通り「着の身着のまま」という姿で現れたのである。殊に子供連れの夫人達は疎開地生活そのままという格好が、その苦労を物語っていた。お気の毒としか言い表せなかった。

勿論、普通のスーツを着て、通常の20kgの旅行鞆を運びながら下りて来た人達もいた。そうした人達はイラン駐在員ではなく、たまたま日本からイランへ出張していて一緒に脱出したビジネスマン達であった。

「いらっしやい！よろこそイスタンブールへ！」

「ご苦労さん。大変だったね」

「もう大丈夫だよ。」

私は一人一人に声をかけ、ねぎらった。そしてバスに乗るよう促した。

ところで、バスの運転手にあらかじめ指示しておいたことがある。それは「海岸沿いの道を通るように」ということである。テヘランはペルシャ湾から遠く離れたアルボルス山脈の山裾の土漠に広がる内陸の都市である。内陸なので空気も乾燥している。そんな所で苦労していた彼らに海を見せれば、きっと心も潤いなごむだろうと思ったからである。



2006年5月に行われた叙勲伝達式でのトルコ航空救援機のクルーたち

バスは空港を出てほどなくマルマラ海沿いの道に入った。一斉に歓声が上がった。豊かな水を見て一度に心が洗われたのであろう。バスはマルマラ海からやがてボスフォラス海峡沿いの道を走った。ボスフォラス海峡は海岸からすぐに丘が切り立っている、とても立体的である。狭いながら蛇行する海と緑豊かな海峡沿いの丘が織り成す独特の景色は、彼らをすっかり魅了し、誰もがその美しさにとりこになったようである。

やがてバスはボスフォラス海峡沿いのリゾート・ホテルのタラビヤ・ホテルに到着した。ゆっくりとくつろいでもらえるよう、市内のホテルではなくこのホテルを選んでおいた。

全員が早速シャワーをたっぷりと浴び生気を取り戻したところで、バスでボスフォラス海峡を更に北に走り、一番北の町サリエルに繰り出した。ここからはもう黒海が見える。そして魚レストラン「ウルジャン」で歓迎大宴会を開いた。

まずはビールで乾杯である。イランではアルコールが禁止されているがトルコでは自由である。よく冷えたビールを口にすると、全員が「今いるのはイランではなく、トルコなのだ」と改めて実感した。

トルコ料理は世界三大料理の一つとして称えられる。しかも日本人の口にはよく合う。脱出成功のお祝いなので、私は伊勢えびの刺身も存分に奮発した。勿論、我が家から当時トルコでは入手不可能なキッコーマン醤油を持参し、提供することを忘れはしなかった。

彼らはトルコ・ワインとトルコの地酒ラクを楽しみながら、冷たい前菜、温かい前菜、メイン・ディッシュ、と次々と平らげていった。ところが「こんなに食べて苦しい」と言っていた彼らが、なんと「店先に並んでいる生牡蠣がおいしそう」と言い出したのである。

それを聞き、私はこう言って反対した。

「皆さんが日本に到着するとマスコミが待ち受けている。折角トルコ航空に救出されたのに、当たってお腹を壊したのではしまらない。もう3月も下旬で暖かく生牡蠣は危険なので、焼き物にしてはどうでしょう」

彼らは不承不承納得してくれたようであった。

しばらくすると店員が「電話だ」と告げにきた。私は席をはずし店の受話器を取った。電話の相手はトルコ政府であった。長電話を終えて席に戻ると驚いた。なんとテーブルにずらりと生牡蠣が並べられ、レモン

をふんだんにかけ、皆がおいしそうに口にしているではないか。驚いて聞いてみると、彼らは答えた。

「こんな幸せはない。我々は地獄から天国に来たんだ。牡蠣に当たるなら当たってもいい。たとえコレラになっても、今までのつらい思いを思えば、ずっと幸せなんだ」

「これからトルコに足を向けて寝ない！」

「今後トルコ航空の悪口は言わない！」

彼らの気持ちは痛いほどよく解るが、私の気持ちは複雑であった。

翌日、彼らはイスタンブールを離れたが、幸いなことに食中毒にかかることもなく全員無事日本に到着したのは慶賀の極みであった。

### 13. 「安全の保障がなかったから」救援機を出さなかった日本と 「安全の保障がなかったから」救援機を出したトルコ

さて私は、「なぜ日本の航空会社は、日本人がこれほどの危機に直面しているというのに救援機を出さなかったのか」とずっと不思議に思っていたので、日本側に聞いてみた。すると、「航空機を派遣してもサダム・フセインが設定した刻限に間に合わない危険性があり、航空機の安全の保障がなかったから、救援機を出さなかったのだ」という答えが返ってきた。

私はトルコ航空の総裁にも聞いてみた。

「なぜトルコ航空は、他国民である日本人のために救援機を出してくれたのか？」

すると、ユルマズ・オラル総裁は次のように答えた。

「日本人の安全の保障がなかったから、一刻も早く日本人を救出するために救援機を出した。」

トルコは日本人の安全保障がないから、日本人の救出のために、自分達が危険であるにも拘わらず救援機を飛ばしてくれたのである。つまり、「安全の保障がなかったから」という全く同じ理由で、日本は救援機を出さず、トルコは救援機を出したのである。本来ならあべこべであるべきであり、対照的な結果に考えさせられてしまった。

どうい理由であったにせよ、日本が救援機を出すことができなかつただけに、トルコが救援機を派遣した事実はどんなに偉大なことであつたかと痛感させられた。

#### 14. 日本人は飛行機で、トルコ人は車で脱出

当時、テヘランには約600名のトルコ人ビジネスマンがいた。彼らほどのようにトルコに脱出したのであろうか？

当日、テヘランには日本人救援の特別機の他に定期便がもう1機飛来していたので、それに搭乗してトルコに帰国したトルコ人も大勢いた。ただし、搭乗できる人数は限られている。残る500名近くのトルコ人はなんと陸路、つまり車で帰ったのである。テヘランからイスタンブールまでは、猛スピードで飛ばし続けても3日以上かかる。つまりトルコは自国民を車で帰国させ、外国人たる日本人に特別機を提供し救出したことになる。

「こんなこと日本だったらできるだろうか？」

「こんなこと日本だったら許されるだろうか？」

私はそう考えると、まず恐れたのはトルコのマスコミの反応であった。

「外国人である日本人を優遇し、自国民であるトルコ人を粗末に扱った」と報道しかねない。野党がスキャンダラスにこの件を取り上げ、オザル首相批判を行っても不思議ではない。

私は固唾を飲んで事態の推移を見守った。しかし、それらは全くの杞憂であった。なんと、誰も問題視しなかつたのである。トルコのマスコミ、そしてトルコ国民の度量の大きさに私は感銘を受けた。

#### 15. トルコ航空へお礼

日本では、マスコミがこの救出事件をこぞって「救援の翼」と題して、

トルコの友情ぶりを報道していた。ただ一誌が、「トルコは日本の長期資金援助を期待して救出したのでは」とうがった見方をして報じていたのは、実情を知っているだけに情けなかつた。

日本政府は外務大臣がトルコの外務大臣に感謝の電報を送った。私は感謝の気持ちをもっと具体的な態度で示したかった。そこでジェミニという乗用車2台をトルコ航空に寄贈することにした。ジェミニはいすゞ自動車のディーゼル乗用車として人気が高かつた。また、当時、伊藤忠商事といすゞ自動車はトルコに出資していすゞ自動車のトラックの国産化を進めていたこともあり、この車を選定したのである。この2台の乗用車はトルコ航空の総裁公用車として長らく使われた。

私は「トルコ航空に必ず恩返しをしよう」と自分に誓った。そしてやがてそのチャンスがやってきた。トルコ航空がエアバスの長距離大型機310型を2機購入したいという。しかしその資金がないので、15年もの延べ払いが必要であった。当時、トルコのカントリー・リスクは高く、民間企業がそんな長期の信用供与をトルコに対して行うことは不可能であった。しかし調べてみると、トルコ航空は支払い遅延を起こしたことはそれまでに一度もないことが分かつた。



いすゞ自動車のジェミニの贈呈式で。左はトルコ航空オラル総裁(当時)、中央は筆者。

私は、「恩返し」と「支払い履行実績」と「支払い遅延が発生したら私が必ず取り立てる」という3つのキーワードで関係者を説得し、ついにトルコ航空とファイナンス・リース契約を結ぶことができた。

ところで、トルコ航空はイスタンブール＝成田間の就航を望んでいた。ところが当時、成田の発着枠はすでにいっぱいであった。日本政府は成田ではなく、大阪や名古屋へ乗り入れるよう勧めていた。ところがトルコ航空はどうしても成田に乗り入れたいとこだわっていた。そこで、私は当時の日本の運輸省高官に言った。

「トルコ航空による救援事件をもうお忘れになったのでしょうか？」

彼は答えた。

「そうだったね。そんな事件があったね」

こうしてトルコ航空の希望通り、成田乗り入れが決まった。そしてなんと先に私が契約した長距離大型機2機が成田に就航することになったのである。1989年、一番機がイスタンブール空港を離陸し成田に向かった。そしてその後、成田便の機体はエアバス340型に変わったものの、現在も成田便はトルコ航空のドル箱路線になっている。

なお、心配された15年のリース契約については、トルコ航空は契約通り、1度も、1日たりとも支払い遅延を起こすことなく数年前に完済した。トルコのカントリー・リスク云々を言う人たちに認識しておいて頂きたい事実である。

## 16. 恩人

さて、一体誰が日本人を救出してくれたのだろうか？

まず何と言っても、危険をも顧みず果敢に救援機を派遣してくれたトルコ航空である。次に、野党やマスコミがスキャンダル視しかねない政治リスクがあったにも拘わらず、あえてリスクを取り大英断を下してくれたオザル首相である。そして、救出事件をスキャンダルにせず、ありのまま受け容れてくれたトルコ国民である。つまりトルコ航空、オザル首相、トルコ国民がこの救出事件の恩人である。

## 17. オザルさんとの関係

### 出会いからパジャマ友達になるまで

私がオザルさんに初めて会ったのは1976年であった。当時、彼はいくつかの民間企業の顧問として活躍していた。オザルさんは親日家であり知日家で、日本の産業に大きな関心を寄せていた。

当時のトルコは農業が最大の産業であったので、日本の農業技術に関心を示していた彼は、まず日本の農業用トラクターの製造を行うことを始めた。オザルさんの希望は日本企業のトルコへの投資であった。しかし当時のトルコは国自体が経済破綻の危機に瀕しており、日本の企業がトルコのカントリー・リスクを取れるような状態ではなかった。トルコ政府の外貨繰りは窮乏を極めていたので、部品を輸入する外貨の獲得は至難であった。なんとかやっと獲得した外貨でトラクター部品を日本から輸入し、ほそぼそと組み立てから始めるのが精一杯の状態であった。

1978年にトルコは世界で最初のリスケジューリング国となり、世界中に悪名を轟かせるという状態に陥った。トラクター製造事業は風前の灯となった。こうした困窮の時期を乗り切るべく、オザルさんも私も共に奮闘に奮闘を重ねた。2人とも筆舌に尽くし難い辛酸を舐めたが、諦めずお互いに全力を尽くし、この困難に対峙していたので、信頼関係が醸成され、親しくなっていた。

その後オザルさんはデミレル内閣の経済担当大臣となったが、その後も頻繁にお目にかかった。大臣室にもちよくちよく呼ばれ、日本の経済運営を参考にしたいと、私の意見をよく聞いてくれた。彼は私を「親友モリナーガさん」と呼び、人にも紹介してくれた。

そして1980年に、彼は「オザル経済改革パッケージ」を発表した。これが今日のトルコ経済運営の基礎となっている。

政治、経済、社会いずれも混乱の極みの末、世直しのために軍が立ち上がり、1980年9月に、国民待望のクーデターが起きた。政治家が全て追放された中でオザル大臣は経済運営のエキスパートとして軍事政権に認められ、経済担当副首相として取り立てられた。こうして彼は更に経

済改革を加速して進めることになった。

オザル大臣は副首相となり超多忙状態になったが、私との親交は続き、時々拙宅にご夫妻で和食を食べに来て頂いた。副首相となると国会などで公務多忙となり、昼間大臣室で会うこともままならず、私がよく彼の自宅に早朝か夜に出かけて会談を行った。まさに「夜討ち朝駆け」であった。私が早朝訪問すると、ご夫妻ともパジャマにガウンをひっかけただけの姿で対応してくれることになる。いつもご夫妻がパジャマを着ている朝か夜に平気で来訪するので、いつの間にか奥さんは私を「パジャマ友達」と言うようになった。

## 第2ボスフォラス橋プロジェクト

1981年12月、私は満6年のアンカラ駐在生活を終え帰国した。

1983年12月、オザルさんは圧倒的国民の支持を得て総選挙に勝ち、首相となった。

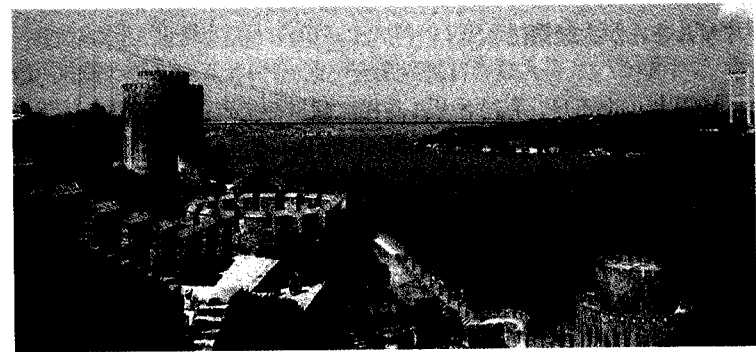
1985年1月、私はイスタンブルに赴任した。オザルさんは首相になっても私を「日本関係私設顧問」と言いながら、大事にしてくれた。

1985年3月にオザル首相がテヘランに日本人救出のため救援機を派遣してくれたことは上述通りである。

1985年4月、我が陣営が20世紀末の大プロジェクト「第2ボスフォラス橋」を受注した時、オザル首相は殊に喜んでくれた。このプロジェクトは計画段階で、「美しいボスフォラス海峡の景観を損なう」という問題を指摘され実現が難しくなり、誰も解決できない凶悪のプロジェクトになりかけていた。しかしオザル首相が率先して難問解決に当たり、計画を実現させたのである。オザル首相が唯一解決し実現させたことから、このプロジェクトの生みの親となった。

最強のライバルであった英国勢を日本勢が破ったことで、「何としても英国勢が受注する」と信じていた当時のマーガレット・サッチャー首相が激怒したことをマスコミが取り上げ、世界の注目を集めた。

サッチャー首相が当時の中曽根康弘首相にクレームした時にも、オザル首相は「公平な入札の結果、日本勢が受注したのであり、何ら問題ない」と発言し、解決を図ってくれた。



ルメリ・ヒサルと第2ボスフォラス橋

因みに私は当時の駐トルコ英国大使から、「君は今後英国に入国できないよ」と言われた。「まさか」と思いつつ、後日ロンドンに恐る恐る行って見たが全く問題なく入国できた。やはり大使の冗談であったが、それほどまでに英国勢が欲しかったプロジェクトだったのである。

## 日本製造業の対トルコ投資の実現～いすゞ自動車のトルコ進出～

1985年10月、いすゞトラック製造事業に伊藤忠商事といすゞ自動車が出資することになった。オザル首相の念願であった日本の製造業の対トルコ投資が遂に実現し、これが第1号案件となった。

オザル首相は大変喜び、国産化記念式典に参加してくれた。そして式典では国産第1号車に乗り込み、自らハンドルを握り運転し悦に入っていた。

この第1号投資事業が成功したことから後にブリヂストンやトヨタ自動車と言った超弩級のトルコ進出が実現したのである。ブリヂストンはトルコ工場から近隣諸国へタイヤを輸出しているし、トヨタはトルコ工場から欧州へカローラを輸出し、トルコ最大の輸出貢献企業となっている。輸出立国を目指していたオザルさんは、トルコ進出の日本企業が、現在トルコの輸出にこれほどまでに貢献していることを、天国から見ていて大いに喜んでいるはずだ。

## オザルさんが大統領に

1989年のある日、私はオザル首相に意見を求められた。

「親友モリナーガさん、私が大統領になるべきか率直な意見を聞かせてほしい」

と言うのだ。私は次のように答えた。

「大統領になるのは名誉なことだ。しかし今、トルコに必要なのは経済改革である。オザル経済改革は未だ道半ばなので、改革を急ぐ必要がある。いつの世でもどこの国でも改革を行おうとすると、既得権者や保守的な人達から反対され、進まない。今のトルコも同じではないか。改革を進めるには力と強い意志が必要だ。今あなたが進めている経済改革は、あなた以外誰も推進できない。あなたはやり遂げるのに必要な強い意志と、首相としての権限と権力を持っており、しかもそれらの活用方法も熟知している。

一方、大統領は元首である。経済改革のような具体的な案件は首相の仕事であり、大統領の仕事ではない。しかも、経済改革を推進するのに必要な実質的権限は首相の方が優っている。あなたが大統領になったら、改革は止まってしまう。したがって率直に申し上げると、私はあなたが大統領になるのは賛成ではない」

オザル首相は珍しく黙ってうなずいていた。

結局、オザル首相はそんな私の意見を聞き入れることなく、その後大統領になった。しかし、大統領になっても私とはそれまでと変わらずに親しく付き合ってくれた。大統領に上りつめても決して驕ることなどなかったのである。私はそんな彼を尊敬し、そうした彼の姿勢に心から感謝の念を持っていた。

## 悲しい別れ～オザル大統領の急逝～

1993年4月、オザル大統領は中央アジア諸国の歴訪から戻った翌日、大統領官邸でいつもの朝のウォーキング・マシーンでの歩行中に突然倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。あまりにも突然のことで、文字通り急逝であった。

国葬では、世界各国から集った大勢のVIPの中でもどういうわけか私は、米国のジェームズ・ベーカー元国務長官の数人後という順序で、最後の別れを棺に告げる榮譽に浴した。

国民に愛されたトントンの急逝であったので、国民の悲しみは全トルコのあらゆる地域から地鳴りのように響いてきた。全国民から尊敬されているケマル・アタテュルクの再来とまで言われたオザルさんの急逝であったので、それだけに国民の嘆きは大きかった。

オザルさんが亡くなって以来、私もどういうわけかどこか力が今ひとつ入らない状態であった。彼は私を信頼してくれていたし、私も彼を心から信頼していたのだ。天が彼をトルコ国民から召し上げたのは、政治、経済、社会の改革の道半ばであっただけに、あまりにも早過ぎた。惜しい人を亡くしてしまった。

私が尊敬するトルコ人は多いが、あえて3人に絞り名前を挙げると、ケマル・アタテュルク、トゥルグット・オザル、ケナン・エヴレン(1980年に救国のため無血クーデターを起こし、それまで荒れ切っていた政治、経済、社会の秩序を見事取り戻し、約束通り3年後に民政移管を果たした)である。



日本・トルコ協会の米倉功会長(左)とオザル大統領

## 18. トルコ航空には2度助けられた

私がトルコ航空に助けられたのは1985年3月の時だけではない。1980年10月にイラン・イラク戦争が始まって、やはりイランにいる在留邦人が空爆を恐れ、脱出を図った時があった。その時は空港もイラク軍機により空爆されたり、飛行機もイラク軍機に爆撃されたりする恐れがあったので、やむをえず陸路でトルコへの脱出を図ったのである。

彼等は大型バスを仕立てて脱出することにしたが、昼間は爆撃機の標的になりやすいので夜間にテヘランを出発した。バスのライトを点灯したまま走行すると標的になってしまうというので、しばらく点灯しては消灯しながら走るという、極めて危険な走行であった。しかも一刻も早く脱出するために100キロ近い猛スピードである。

こうして緊張を強いられ大変な思いをしながらも、イランのタブリツを経て、翌朝ようやくトルコの国境にたどり着いた。国境は脱出者であふれ、出国手続きは時間がかかった。「安全なトルコ領が目と鼻の先にあるわけだから」と言いつつも、彼らは必死ではやる気持ちを抑えていた。そしてついに出国手続きと出国通関手続きを終えた。今度はトルコ入国手続きと入国通関手続きがあるが、これは簡単であった。そしてトルコの国境の街エルズルムのホテルで休憩を取るようになった。シャワーを浴び冷たいビールを飲んで、無事トルコ領に脱出した喜びを味わっていた。

ところで彼らはエルズルムからアンカラまで、延々バスで来る手筈になっていた。エルズルム空港からアンカラ行きの飛行機は脱出者ですでに満席となっており、バス以外に手段がなかったからである。しかしバスだと2日の行程になってしまい、疲労困憊してしまう。難行苦行の彼らの脱出行を思うと、これ以上疲れないように、なんとしても飛行機に乗せたかった。私はトルコ航空と諦めずに交渉を続けていた。やがてトルコ航空から連絡が入り、「とにかく空港へ行け」と言う。そしてなんと25名全員の搭乗を許可してくれたのである。

こうして彼らはそれ以上に疲れることなく、空路アンカラに脱出することができた。後で聞くと、脱出者ですでに満席であったが、トルコ航

空はトルコ人を乗せず日本人に席を回してくれたことが分かった。当時、トルコ航空はまだコンピューター予約システムをとっておらずマニフェスト予約管理システムであったので、こんな融通を図ることができたのだ。それにしても自国民たるトルコ人よりも外国人である日本人を優先搭乗させてくれたトルコ人の親日ぶりには、いくら感謝しても感謝しきれない。

アンカラでは25名全員を我が家に招いた。その日彼らはなんとついていたことか？珍しいことに、家内が大きな鯛を手に入れることができたのである。アンカラへは、魚を遠くイスタンブルから運ぶ。何の魚が届くのか全く予想できないのが常だ。大きな鯛を見て、全員が大喜びであった。テヘランでは絶対に味わえない鯛の刺身を肴に、トルコ・ビールとトルコ・ワインで無事脱出の喜びを味わったのである。その日はどういうわけかつきにつきまくり、その他の海の魚も多種入手できたので、家内が寿司を次々と大量に握った。海から遠く離れたテヘランでは食べられない海の魚を味わい、くつろいでもらった。こうして彼らは安全なトルコに脱出し、それぞれに日本に向かったのである。

この時も1985年の時も共通しているのは、トルコ航空が自国民たるトルコ人よりも外国人たる日本人を優先させたことである。あれほどの熱狂的愛国者であるトルコ人が、日本人が困っている姿を見ると、自分達を犠牲にしてまで助けようとする。「自分だったらこんな判断できるだろうか？」と私はいつも思う。

勿論、トルコ人は外国人に対してだけでなく、一般的に困っている人を見ると放置せず必ず助けようとする。見て見ぬふりをするようなことはないのだ。しかし相手が外国人、とりわけ日本人だと知ると、助けようという気持ちがさらに強くなるという。日本人にとりこんなにありがたい友人がいるのは、実に頼もしいことである。

## 19. 日本の安全保障上、最重要な国トルコ

私が長年トルコに駐在して認識させられたことがある。それは「日本

にとり最も重要なことは、日本の安全保障である」と痛感したことである。

駐在するまでは、日本の安全保障についてそれほど真剣に考えたこともなく、平和ボケしていたと思う。ところが私がトルコに駐在していた当時、北側はソ連と国境を接しており、トルコの周辺には、イラクのフセイン、イランのホメイニ、リビアのカダフィ、シリアのアサド等、我々とはあまりにも価値観の異なる、いわば信じられない言動をとる指導者達がいた。周辺国にそうした指導者達がいると、トルコがNATOに加盟し、NATO軍の中でも米軍に次ぐ兵力を保持している本当の理由が解る。

ところで、日本は世界でそんなに好かれている国だろうか？反日教育をしている中国や韓国だけではない。インドネシアでは昔、田中角栄首相が訪問した時は日の丸が焼かれ卵を投げつけられた。昭和天皇が欧州を訪問された時も、同じような事件が起きた。

勿論、世界には親日国と評される国々がある。そうした国で親日の理由を尋ねると、「日露戦争で日本が大国ロシアに勝ったから」とか、「日本が多額の資金援助をしてくれる」とか、「技術立国で尊敬できる国である」とか答えてくれる。トルコ人もそのように答える。でも、そうしたトルコ以外の親日国は日本が困っている時にどのように助けてくれたのであろうか？トルコはいつも日本が困っている時に助けてくれた。

トルコ航空による在イラン邦人救出事件以来、私は「トルコという国はいざという時には日本にとり当てになる国だ」、「日本の安全保障上信頼できる国」と思うようになった。なぜなら、トルコは他の親日国とは異なり、打算抜きの本物の親日国であるからである。こんな国は日本にとり世界でも珍しい。「日本はこういう国こそ、慣例にとらわれず官民挙げて、本当に心から大切に扱わなければならない」と私は訴え続けている。

## 20. トルコが親日国になった主な事由

トルコがなぜこれほどまでに超親日国になったのであろうか？それは

両国が歴史的に敵対することなく、トルコ人にとり日本が好ましく、尊敬できる国であり続けたからである。その主な事由を挙げると次のようになる。

### エルトゥールル号遭難者救援

1890年、オスマン帝国最初の使節団が、明治天皇との謁見を終えて帰国する途中、乗船エルトゥールル号が和歌山県串本町大島沖で台風のため沈没し、団員656名のうち多くが犠牲になるという海難事故に遭った。この時、大島島民はこぞって献身的に救助活動を行い、69名の生存者を得たのである。また、この痛ましい事件を知り日本全国から義捐金が寄せられた。明治政府は生存者を義捐金と共に、日本の軍艦で丁重にイスタンプルまで送り届けた。

不幸な事件であったが、トルコはこの事件に対する日本の官民上げた一連の対応の素晴らしさと暖かさに感銘し、日本人に敬愛と親愛の念を抱いた。これが親日の始まりである。

### 1905年 日露戦争で大国ロシアに日本が勝利

ロシア-トルコ百年戦争に代表されるように、トルコにとりロシアは長年宿敵であった。そんな憎き強大国と、日本が戦うことは、トルコにとり我がことのように、殊の他関心が高かった。そしてついに小国日本が勝利したことは、全トルコ人にとっても誠に痛快で、熱狂する事件であった。トルコ人の男の赤ん坊や店の屋号にノギ、トーゴーを命名する例が多かった。

### アタテュルクが明治天皇を尊敬

1923年にトルコが共和国となり、ケマル・アタテュルクが初代大統領になる。アタテュルク大統領は就任以来、執務机に明治天皇の写真飾っていた。明治天皇を、明治維新革命を成し遂げた改革者として尊敬していたからである。トルコ近代化という革命に邁進しているアタテュルク

初代大統領にとり、明治天皇は励みとなる人であった。

アタテュルクとは「トルコの父」という意である。トルコ議会在救国、近代化の祖として感謝の念を込めて贈った名前である。そんな最高の名前をもらうほど、全国民から尊敬されているアタテュルク大統領が写真を飾り、しょっちゅう明治天皇の話や日本の話をするのだから、この波及効果は大きく、一般の人々にいたるまで日本を否定なしに尊敬の念で見られるようになったのである。

### トルコの軍人達が朝鮮戦争の帰路に立ち寄った日本に好感を抱く

1950年から1960年、トルコ軍は朝鮮戦争に国連軍として参加した。その累計は5万人にも上った。前線で勇猛果敢に戦ったトルコ軍の傷病兵は数多く、治療のために日本にも送られた。治療のために日本に立ち寄り休養後トルコに帰ったが、彼らは一様に日本を気に入った。当時の日本は戦後からそんなに経っておらず、貧しく荒廃から立ち直っていなかった。そんな日本のどこを気に入ったのだろうか？

トルコ人から見ると穴の開いたズボンをはいている日本人はいなかった。穴は必ず繕われており、折り目がついていた。日本人は夜寝る時に、ズボンを布団の下に敷き寝押ししていたのだ。女性もプリーツ・スカートで寝押しし、折り目をきれいに付けていた。軍では穴の開いたズボンや折り目のないズボンを履いていたら上官に叱られる。トルコの軍人から見ると、こうした日本人のディシプリンは軍人並みに高く映り、感心したのだ。

当時、日本の道路は表通り以外舗装されていなかったが、人々は毎朝自分の家の前だけでなく隣の家まで、ほうきで競い合うように掃き清めていた。トルコの軍人は、こんな清潔な日本人を目の当たりにして感銘を受けた。

当時、日本人の家はまだ粗末で、まさにそま家だった。冷蔵庫はまだ氷を入れて冷やす程度のものであったので小さく、たいして蓄えがなかった。それでもそんなそま家で、心のこもった食事を出して、トルコ人を精一杯もてなした。これらの例で示されるように、ディシプリンが高く、清潔で優しい日本人をトルコ人はすっかり気に入ってしまったので

ある。

やがてトルコ軍人は帰国してそれぞれの出身地の我が家に帰った。そして家族に日本のことをみやげ話として聞かせた。当然それを聞いた家族も日本のファンになった。トルコ兵はトルコ全土から招集され、任務を終えるとそれぞれの出身地に戻るのだから、こうしてトルコ全土が益々親日になったのだ。

### 技術立国、輸出立国日本に対する敬意

1960年以降、天然資源が乏しいにもかかわらず日本は輸出立国となり成長した。「日本は鉄鉱石と石炭を原料として輸入し、製造した鉄を鉄鋼石と石炭の採れる国に安く輸出する」こう言いながら、トルコ人は優秀な技術力を持つ日本に現在に至るも敬意を払ってやまない。

トルコが親日国になる事由はまだまだあるが、特筆すべきは以上のような事項だ。

ところで最近気になるのは、そうしたトルコ人に対し尊大な態度を執る日本人が、まますみ受けられるようになったことである。こうした恥ずべき人たちは、折角の彼らの親日の気持ちを損ないかねない。日本人は、官も民もそれぞれのレベルで「世界一の親日家であり、真の友人であるトルコ人を大事にするよう」心すべきと思う。

【写真出所】

- 10 頁 筆者所蔵  
13 頁 アナトリアニュース 117 号より (提供: 在イスタンブール総領事館)  
17 頁 トルコ航空機内誌 Sky Life より  
21 頁 「トルコ共和国第 2 ポスボラス橋完成記念式典」(伊藤忠商事)  
より  
23 頁 同上

【著者紹介】

森永 堯 (もりなが たかし)

- 1965 年 伊藤忠商事株式会社 入社  
1975 年～1981 年 同社アンカラ事務所  
1978 年～1981 年 同社アンカラ事務所長  
1985 年～1995 年 同社イスタンブール支店長  
1995 年～1997 年 同社海外市場部長  
1998 年～2001 年 同社中近東総支配人兼中近東会社会長  
2001 年～2004 年 伊藤忠マネジメントコンサルティング株式会社社長  
2004 年～2006 年 同社顧問  
2006 年 3 月 同社退職

- 1981 年～1985 年 日本・トルコ協会 常任理事  
1995 年～1997 年 日本・トルコ協会 事務局長  
2001 年～(現在) 日本・トルコ協会 理事

- 1989 年 トルコ・日本経済委員会より功労賞受賞  
1999 年 トルコ共和国政府より高等功績賞受賞

テレビ放映

- フジテレビ 「アンビリーバボー」 2003 年 8 月 21 日  
NHK 「プロジェクト X」 2004 年 1 月 27 日  
(同年 2 月 1 日再放送)  
TRT (トルコ国営放送) 2004 年 8 月

---

平成19年1月

アナトリアニュース (第118号) 別冊

著 者 森永 堯

発行責任者 千田 茂

発 行 所 日本・トルコ協会

〒107-0061 東京都港区北青山2-5-1 伊藤忠ビル内

印 刷 所 三協美術印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川4-10-12

---